

# 比翼ひよくの束たばね 第七十回

## ふるさととは 遠きにありて思うもの

今年のふるさと祭りは、8月16日に実施することになった。旧盆のおくり日である。子どもたちには、少年時代の夏の思い出を残してほしい。そして旧盆で帰省された方には、懐かしいふるさとの思い出を味わっていただきたいとの願いが込められている。

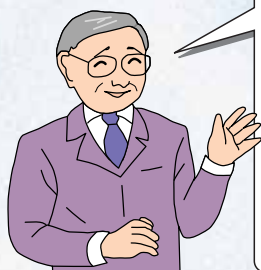
「ふるさととは遠きにありて思うもの、そして悲しくうたうもの」

よしやうらぶれて異土の乞食となるひとりと都のゆうぐれに、ふるさととおもひ涙ぐむ・・・」

室生犀星の抒情小曲集の一節である。昭和の経済成長が始まる中で、集団就職など地方の若者は、生まれ育った土地を離れ、親兄弟、幼馴染の友と別れ新しい世界に飛び込んだ。

いわゆる集団就職で金の卵と称された中学校を卒業した若者は、夢と希望を抱

私(市長)の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



いて上京し、日本の高度経済成長を支えたのである。

これらの若者はほとんどが農家の次男や三男で、忘れてならないことは、戦前生まれの父母から教育を受けた世代であり、戦争や終戦直後の世相を実際に体験していた人たちである。

郷里に残る私たちは、矢板駅から友を見送った。なんとなく寂しくて、人知れず涙を流した。

上京して、住み込みで町工場で働き、さまざまな苦難を乗り越え築きあげてきたこれまでのつらい思い出を友から聞いた。

くじけそうになると、優しく包んでくれた父母、なつかしい友、楽しく遊んだ山や川を思い浮かべ、自分を取り戻したと言った。

ふるさととは、時として意思をくじけさせるほど人を引き戻す力を持っている。母親の腕に抱かれたような感覚を呼び覚まし、都会で苦しくなると戻りたくてたまらなくなる。

しかし、ふるさととは帰りたくてもすぐには帰れない遠い場所であり、戻ることのできない過去の美しい記憶としての存在なのである。

先に記した室生犀星の詩には、一旦ふるさとを出た以上、たとえ乞食になっても思いを達するまでは帰ってはならぬという強い意志と、思い出すと涙ぐんでしまふほど、ふるさとへの強いあこがれがうかび出ている。

しかし、時の経過とともに「ふるさと」というものについてのとらえ方がこれまでとは違ってきている。

高度経済成長を経て新幹線が開通し、

交通ネットワークや情報通信網が発達して、人の移動は容易になってきた。そしてふるさととの距離は大幅に縮まった。ふるさととは、もはや距離感を失い、必ずしも「生まれ故郷」ということだけではなくなっているのである。

国鉄のキャンペーン「デイスカパージャパン」のテーマソング「いい日旅立ち」が一世を風靡し、多くの人たちに親しまれた。

また五木ひろしの歌う「ふるさと」では、「誰にもふるさとがある」と歌われている。歌詞の中には「小川のせせらぎ」「杏の花」とあるだけで、固有の場所は示されていない。

つまり、ふるさととは生まれ故郷だけでなく、「日本のどこか」にもあるものになった。ふるさとの本来の意味の生まれ故郷というその「場所」ではなくなってきたのである。

ふるさとを求める人たちがすれば、地方の失われた美しい田園風景、きれいな水や空気、海や山の幸などが、今も残され息づいているところが自らを優しく包んでくれるふるさとと感じ、生まれ故郷という具体的な土地から遊離したものとなっているのである。

今、団塊の世代が退職を迎えている。団塊世代の多くは、生まれ故郷を離れ、高度成長の中の都会で激しい競争を経験してきた企業戦士であった。

その人たちが退職によって企業社会から解放されたのだが、地域社会との長い断絶があり、望郷の念の寄る辺は用意されていない。

新しい孤独が始まり、思い出や懐かしさなど再びふるさとの自然や人と人との

つながりを求めている。

退職後の時間を余生ではなく、人生の第二ステージとして大切にしたいと考えている。

そして、長い老後は、自然の中で、ゆとりを持ってよりよく生きたいという思いが、田舎を選び、そこで畑を耕し、人びとのふれあう日常生活を送りたいと思っている。都会暮らしでは得られない感覚を求めているのであろう。

今日では、ふるさととは生まれ故郷という具体的な所から新たに発見し、選ぶものへと変化してきているのである。

矢板市には、変化に富んだ四季折々の田園風景、澄んだ空気、おいしい水、そして大自然によって育まれた食や日本酒、温泉もある。

しかし私は矢板の一番の魅力は「人」だと思っている。矢板の人は一見引つ込み思案に思われがちであるが、きわめて誠実で、ものすごく地道に努力する。粘り強い「人間力」を持っている。

そういう市民が、この恵まれた土地でいきいきと生活しており、ふるさととして選ばれる要件はそろっている。

風土の育んだ矢板の良さは、外の目で見えることが多い。

まちづくりは、地域外の人たちの強い力が活かされて、一層豊かになる。何よりも自分と違う経験をもち、異なる考え方もつ人びとと出会って、一緒にまちづくりをする。

まちづくりは、地域外の人たちの力が活かされて、一層豊かになるのである。

そのためにも、地域は開かれたものでなければならぬ。

※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。